

1. 序文

早稲田大学古代エジプト調査隊（早稲田大学プロジェクト研究所、エジプト学研究所に所属）は1966年のゼネラルサーベイ以来45年間にわたってエジプト国内の調査に当たって来た。ゼネラルサーベイではほぼエジプト全土（除シナイ半島、西部砂漠とそのオワシス周辺）の遺跡と博物館の状況の調査を行い、その結果ルクソール西岸マルカタ南地区の発掘及び周辺調査を行った。もっとも最初に文化省考古局（現在は考古省）から調査許可を受けていた場所はエジプト中部、アル＝ミニヤ対岸東部山地のディール・アル＝ベルシヤであったが、決定後エジプト政府が外国人を観光地周辺以外へ立ち入り禁止にする指令を出したのでルクソール西岸マルカタ南地区に調査地を移されたものである。

ここで約10年調査を行い、ルクソール西岸クルナ村貴族墓に調査地域を変え今日に至っている。その間1990年に王家の谷・西谷の調査の許可を受け、現在は同地区のアメンヘテプ3世王墓の修復・保存作業を日本国外務省のユネスコ信託基金を使っての国際チームにより活動している。又1987年には下エジプト、ギザ台地クフ王の大ピラミッド周辺調査が許可され電磁波探査レーダーなどのハイテク機器を使って大ピラミッド内に空間を見つけるとか、第二の太陽の船のピットなどの発見を行った。その後メンフィス・ネクロポリスに於いての調査に入り、アブ・シール南丘陵遺跡、ダハシュール北遺跡に於いて電磁波探査機や偏差重力計、人工衛星画像解析などのいわゆるハイテク機器による探査を行い再び数々の遺跡、遺物を発見した。

こうした40年以上の調査実績は成果として場所毎の成学発表や修復保存作業は行えるものの、エジプト全体の文化財の保存・修復など遺跡や遺物の未来へ向けての整備の全体像が見えてこない。

そこで本研究に於いて、これまでの点と線の調査成果をベースに、メンフィス・ネクロポリスの文化財全体をどう未来へ継続して伝えるかの計画提案を行おうと考えたものである。もちろん数年単位でこれら全体を把握することは困難をとまなうものであるが、ともかく一步一步前進していくしかないと考えている。本報告書はその成果の第一歩である。今後ともより深く、より広く調査を行い、その中から問題点を見つけ出し、今後の保存整備計画立案に寄与したいと考えている。

早稲田大学名誉教授
研究代表者 吉村 作治